

Title	歴史考古学の発達と考古学の未来
Sub Title	Developments of the historical arcaeology and its future
Author	鈴木, 公雄(Suzuki, Kimio)
Publisher	三田史学会
Publication year	2005
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.73, No.4 (2005. 4) ,p.121(443)- 129(451)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	民族学考古学専攻設立二十五周年講演録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050400-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史考古学の発達と考古学の未来

鈴木公雄

目次

- 一、日・米・欧に見る先史考古学と歴史考古学
- 二、歴史考古学のparent disciplineは何か
- 三、物質文化研究か歴史研究か
- 四、二十一世紀の歴史考古学の展望

近年、日米欧いざれの地域においても、歴史考古学の躍進がめざましい。古典考古学として早くから確立をみていたヨーロッパ歴史考古学を他の地域と同列におくのはいかがなものかという意見があるのはもつともだが、ここでは古典考古学がほとんど着目しなかつた中世以降の考古学（これを近・現代考古学と呼ぼうと思う）についてみれば、あながち誤った指摘とはいえないだろう。たとえば、イギリスのヨーク市の中心部で行われた再開発によつて調査され、その成果が都市の中心部の地下に、博物館として保存されることになった、中世デーン人の町であるヨービックの例を見れば、明らかである。

しかし、それぞれの地域において、歴史考古学がどの

ような位置づけを与えられているかを見ると、かなり異なった状況があることがわかる。そしてその原因には、それぞれの地域がどのような近・現代を迎えたのかという、それぞれの歴史展開のあり様が如実に反映されているといえる。

この三地域の中では、北米の歴史考古学が最も特異な性格を示しており、ヨーロッパ考古学の移植の中で近代考古学を発達させて来た日本は、その本質においてヨーロッパ歴史考古学の流れの中にあるといえる。日本の考古学はまず先史考古学がアメリカ人のモースにより移植されたが、歴史考古学には江戸時代以来の古物蒐集の伝統と、浜田耕作によつて紹介された古典考古学とがあつた（浜田 一九三九）。そしてこの両者はそれほど違和感なく、日本の古典考古学つまり、古墳時代から奈良時代の考古学へと移行して発達し、歴史学の補助分野としての性格を強めて行つた。

これに対して、北米の歴史考古学は、まずそのスタートの時点からして特異であった。それは、根本的には一四五二年の北米大陸の発見というアメリカの建国の歴史そのものにある。すなわち、中世をヨーロッパで経過し、新大陸で近代を展開させて行つた北米の歴史においては、

先史時代はおろか、コロンブスの渡来以前は完全な異文化であつた。それゆえ、成立期のアメリカ考古学にとっては、先史と有史は、全く異なつた歴史の所産として扱わざるを得なかつたのである。

）の一四九二年における新旧両大陸の文化的遭遇は、それ以後の北米において、社会・文化の隅々に至るまで、大きな差異、区分として作用することになる。たとえば一四九二年を境として、それ以後は Post-Colombian age と呼ばれ近代が始まるのに対し、それ以前は Pre-Colombian age として未開、先史の時代であり、ネイティバ・アメリカンと呼ばれる異人種、異文化の領域となる。

学問上の区分としては、一九四二年以降のネイティティブ・アメリカンは人類学、民族学の扱う対象であり、歴史学の対象とはならない。一九四二年以前においては、その歴史は二分され、一方はヨーロッパの中世、古代を扱う歴史学、古典学の領域と、全くの異文化としてのネイティブ・アメリカンの社会（歴史ではなく）を扱う、人類学にゆだねられてしまう。そして、それぞれの学問は、アメリカの大学においては、人文学部（歴史学・古典学）と社会科学部（人類学）という、異なる学部によりになわれる」とになる（Rouse 一九七一）。

ハリハリでは、その専門を問題としてとりあげようとするつもりはない。ハリハリで注目しておみたい」とは、それぞの地域における近代の歴史がいかに展開して来たかところからとそのものが、歴史というものの理解のみならず、歴史考古学という学問の方法や位置づけそのものに、大きくかかわって来る」と、そしてそれ故に考古学の学問論議にとって見逃せないものである問題が内包されていることを指摘しておけば十分である。

11、歴史考古学のparent discipline は何か

北米の歴史考古学が学問分野として確立したのはやわめておやしく、一九六〇年に行われたConference on Historic Sites Archaeology 以来より、一九六五年のSociety for Historical Archaeology の設立とその機関誌“Historical Archaeology”の発行を待たねばならなかつた。勿論やれ以前に、アングロアメリカンの文化遺産としての植民地時代の教会、城砦、製鉄所、住宅などの歴史考古学的調査が行われていたが、これらの調査を行つた多くの人々は大学で考古学の専門教育を受けた人々ではなく、技師その他の市民が中心であった (Deagan 一九八一)。

一九六〇年以降、北米の大学に歴史考古学の専攻が設置されるようになるが、その際、これまでの北米考古学の伝統であつた人類学部だけではなく、歴史学科や民俗文化研究と関連の深い部局におかれる場合もあつた。ハリハリの例は、古典考古学の講座の多くが人文学部、とくに古典研究やヨーロッパ史に近い部局におかれていたことからわかるように、北米の大学では決して珍しい扱いではなかつたのである。

一九六五年以降その存在を顕在化せしハリハリアメリカ歴史考古学が、その成立当初に取り上げられるを得なかつた最大の問題は、歴史考古学は歴史学なのか、人類学なのかといふ分野帰属の問題だつた。ハリハリは俗に“crisis of identity”とが、Historical Archaeology の“parent discipline”は History なのか、それとも Anthropology なのかといふ形でとりあげられた (Deagan 一九八一)。この問題は、単なる学問の区分論ではなく、History なら人文学であり、人文学部、Anthropology なら社会科学であり、経済学や社会学と同じく社会科学部に帰属するといふ、アメリカの大学制度とその学問編成の根幹にかかるだけに、簡単にすまわれるものではなかつたのである。

現実には、北米の大学の多くで、考古学のトレーニングを行なうことができるものは先史考古学の研究室であったから、歴史考古学といえども、フィールドワークやラボテクニックを修得するには、先史考古学の研究者として教育を受けるのが一般的といえる。たとえば、日本でもよく知られた故ジェームス・ディーツは、そのようなキャリアの中からすぐれた歴史考古学の研究を展開させた。しかし、北米歴史考古学には、その成立当初のみならず今日に至るまで、先史考古学の出身でない研究者が、すぐれた研究を行つている場合が少なくない。

この問題は、ある意味で、今日の北米歴史考古学の中に重要な性格を付与している。それというのは、歴史考古学が扱おうとしている対象に対し、高い関心を持つているのが、先史考古学者よりも、考古学を専門としない研究者だという事実があるからである。この点は、歴史考古学の成立まもない一九六〇年代の後半にまでさかのぼる。この間の事情は、ジェームス・ディーツ自身が、自己の研究をふり返りつつ述べた“*In Small Things Forgotten*”の第二版序文に尽されているといつてよい(Deetz 一九九六)。

ディーツは、一九六九年にオハイオ州トレドで開かれ

たAmerican Studiesのカンファレンスの席上で、著名な民俗学者ヘンリー・グラッシーと話し合う機会があった。ディーツはグラッシーの仕事についてすでに知つてはいたが、個人的に話をするのはこれが初めてであつた。ところが、グラッシーはディーツのそれまでの仕事について十分な理解と関心を持っていていたのである。かくして、ディーツはこのグラッシーとの対話の中から、これまでの先史考古学者たちからは得られなかつた数多くの示唆を受けるとともに、これがそれ以後におけるディーツの学問の展開を決定づけることになつていくのである。

このことは、ディーツの仕事の評価をめぐる問題としても重要である。というのは、筆者自身の北米留学当時(一九七一～七二)においても、北米先史考古学者のディーツに対する評価はそれほど高くはなく、ニューアークエオロジーをとなえる人々の中で、ディーツによるアリカラインディアンの土器の文様分析に対して、文様をパターン化して捉え、そこからアリカラインディアンの社会組織の変化を読み取ろうとする試みとして評価されていた程度だつたからである。この論文の中でディーツが取り上げた、アリカラインディアンの民族誌および平原インディアンの歴史というものと考古学資料とを関連づ

けながら、インディアン社会のダイナミズムを追求しようとするとする、すぐれて歴史考古学的な着眼点に対する評価は、ほとんどきかれなかつた。むしろ、歴史に書いてあることと、考古学にみられる事象とを一致させたにすぎないというような、本質を理解していないものすらあつたのである。

このグラッシャーとの対話以降、ディーツは、マサチューセッツ州プリマス・ファウンデーションの初期植民地村落の調査を基に、記念すべき “In Small Things Forgotten” の初版を一九七七年に著し、歴史考古学者としての地歩を確実なものとしていったのである。そして、これら非考古学系の歴史考古学者の存在によって、北米歴史考古学は、他の地域の歴史考古学にはみられない独自の特徴を持つことになるのである。

三、物質文化研究か歴史研究か

アメリカの近代史は、ネイティブアメリカン、アフロアメリカン、ヨーロッパ移民、アジア系移民という異なるエスニックグループの交錯する “るっぽ” の中から誕生していった。そしてそれ故に、その歴史過程は複雑をきわめる。さらにそのうえに、ヨーロッパ系移民の展

開が、北部、中西部、南部のそれぞれの地域で異なつたエスニックグループによつて行われたため、それらとネイティブアメリカンとの関係や、アフリカから強制的に連れ込まれたアフロアメリカンの存在もからみ、その歴史過程を “史料” に基づいて公平に追うことはきわめてむずかしい。今日まで我々が承知しているアメリカ近代史というものは、つまるところアングロアメリカン系の植民建国史にすぎないと云われるのも、このためである。

このような “史料” (史料) では written document を中心に考える) の持つ限界を是正し、歴史の多面的様相を明らかにする素材として、多くの歴史研究者たちから注目されてきたのは、口承を含む民俗資料、考古学資料であつたといえる。かくして、北米歴史考古学の展開は南部のプランテーション研究 (Singleton 一九八五) や西部開拓史、さらには新しいアメリカ史の全体像の構築に向けて、きわめて有効な情報を提供できる分野として、歴史研究、経済史・社会史の研究、さらにはアメリカンアイデンティティの再構築に至るまで、多くの可能性を示しはじめたのである。

このような状況は、既存の北米考古学研究の広がりをはるかにこえるものとなりつつある。もちろん、人類学

的考古学と今日では呼ばれる北米先史考古学の持つ研究の幅広さは、とうてい日本の考古学の及ぶところではない。しかし、このような状況の中から、あの創立当初の北米歴史考古学が取り上げ、今日でもいまだ解決のついでいなご “parent discipline” の問題があらたな意味をもつて浮上してきたと云ふのではないか。その最大の理由は、歴史考古学の研究対象の中に、歴史学、社会学、都市史、経済史、民俗学といった既存の諸分野との関連のみならず、歴史的に公民権を停止させられていたアーモン集団 (disenfranchised groups) の歴史への復権や、新しいアメリカ像の創出、過去のアメリカ人たちが持っていたアメリカンアイデンティティの修正といった今日のアメリカ社会がかかえる重要かつ包括的な問題に対する新しいアプローチを可能にするものとして注目されているからである。

考古学の立場から、今後の北米歴史考古学の進むべき有力な方向は、新たなる総合的物質文化研究だとする指摘がある。これは、考古学資料もまた物質文化を基本資料とするものであり、その物質文化は考古学資料に限られたものでなく、今日の消費財を含めた広範な存在であるとする理解からすれば、当然のことといえるが、これ

はまた、考古学研究の方法におけるかなりの部分が物質文化研究の枠組に吸収されることをも意味する。そのように考えると、考古学の方法というもののかなりの部分は、いかにも “モノ” (物質文化) を扱うかという技術的性格が強くなると考えられるを得ない。さらに、その技術的方法というものは、決して考古学資料のみに有効なものではなく、より広い対象の資料に有効なものでなければならない。

何故この点にこだわるかといえば、すでに述べたように、歴史考古学が明らかにする諸成果の中には、考古学者が思いもつかないような分野の研究者にとって、きわめて有効な情報をもたらす可能性がみえて来たからである。このような時には、その分野の研究者が場合によっては歴史考古学に参入してくることも十分にありえる。しかし、その分野の人にとっては宝の山とも思える考古学資料から、有効な情報を読み出そっとしても (decode)、考古学資料の扱い方をまずもって知らなければ不可能となってしまう。その操作をいちいち考古学者にゆだねるのはロスであり、また適切な情報が得られるとは限らない。したがって、この方法は、非考古学の研究者（本格的に考古学をトレーニングされていない研究者）も操作

可能な内容でなければならぬ。

その意味では、新しい歴史考古学の性格を、二分法的に物質文化研究か歴史研究かを問うことではないだろう。むしろ、それらの問題をめぐつていかなる歴史考古学の将来像が考えられるのか、そしてそれに基づいて我々自身どのような対応をとるべきなのかを考えるほうが建設的である。以下にその点に焦点を当てて、歴史考古学の将来像を展望してみたい。

四、二十一世紀の歴史考古学の展望

歴史考古学の多面的な展開は、考古学研究の時間的奥行きと空間的な幅を著しく増大させた。しかしこのことは、考古学の研究法がより広い視野のもとで操作される方法体系として整備される必要のあることを教えるものとなつた。それと同時に、考古学の将来が新たな「物質文化」の研究を指向するのみでよいのか、それとも、そこを足がかりとして幅広い歴史・社会・文化の研究へと迫りうるのかが二十一世紀の考古学の大きな方法的課題として考えられねばならない。

北米の歴史考古学の魅力は、何と言つてもモノの研究から脱し、コトの研究を指向している点である。これは

マイノリティの研究を扱うアフリカ系アメリカ人（アフロアメリカン）やネイティヴアメリカンの研究が近年の歴史考古学の中でいかに比重を高めているかを見ればわかる。たとえばディーツの *In Small Things Forgotten* の第二版における改訂部分の大部分が、アフロアメリカンの歴史考古学に費やされていたり、筆者が簡単に紹介したネイティヴアメリカンと合衆国騎兵隊とが戦闘を交えた古戦場の考古学の持つ役割などを見れば明らかである（鈴木 二〇〇〇）。

この種の研究に見られる方向性の中に、近・現代史への指向と、社会史、経済史、社会政策研究への指向の双方が認められる。そして指向の中に、モノの研究のみでは済まされない、新しい歴史考古学の方向が見て取れるのである。これはつまりところ、歴史考古学がより多くの歴史研究の分野から様々な成果やコンテクストを学び、発展し得る余地のあることを示している。そしてこの点を今後の歴史考古学の展開にいかに生かして行くかが重要になる。

翻つて考えるに、この北米の歴史考古学の特徴は、日本歴史考古学にとつても見逃すことの出来ない重要な点である。日本の歴史考古学はその発達の過程で、あま

りに長く歴史研究の補完物としての存在が続きすぎた。むしろ今日では歴史考古学はそれ以外のなにものでもないとするような風潮すら感じられないわけではない。その点で、モノの研究に安住している日本考古学にとつては、北米歴史考古学の示すコトの研究の充実した状況を取り入れるのは、これから日本歴史考古学にとって有効であろう。

モノの研究自体は考古学における基本として全く必要ないというわけではない。ここで問題にしたいことは、日本の歴史考古学がモノの研究だけで充分であり、コトの研究は他の分野に任せておけば良いと考えているとすれば、これこそが問題だと言うのである。歴史考古学は、他の多くの分野と交差する様々な問題を抱えて研究が行わるのであり、その際歴史考古学の側においても、それぞれの分野で考えられているコトの研究を理解することは無しには、共同研究の第一歩たる相互の分野同士での理解すら達成されないことになってしまふことを愁うのである。

再び北米考古学の立場に立つて考えると、今度は日本の考古学が得意とするモノの研究をもつと積極的に導入することにより、効果的な研究内容になる場合がしばし

はあるように見うけられる。たとえば、北米の歴史考古学には歴史的なコンテキストの提示が乏しいケースがある。個々の研究の中に見られる問題設定、分析のための方法に限つてみれば、興味ある内容が示される場合においても、それらがより広い歴史的な展開の中に位置付けられる研究が乏しいのである。

たとえば、カスターの古戦場に関する研究は、弾丸や薬莢のような個々の遺物の分析、それに基づく戦闘地域の推移とその復元と言つた極めて興味深い研究が展開される。しかし、その戦闘の背後に存在した歴史的な問題——たとえばこの戦闘の前後でネイティヴ・アメリカンの生活や文化がどのように変化して行つたのか、そしてそれが彼らの社会や文化にどのような影響を与えたのかといった視点の提示がもう少しつきりと示されても良かつたと考えられる。また、アフロアメリカンの研究についても、この歴史考古学上のテーマと、初期移民史との関わり、奴隸制度全体との関連をどのように捉えるかといった視点の提示が乏しい恨みがある。

敢えて大胆な要約を試みるとすれば、個々の研究そのものは興味深い内容を持つものの、それがそれで完結してしまう、個々ばらばらな研究として提示されている傾

向がある。これでは「歴史」考古学と並ぶ題名にやや背くのではないだろうか。これらに対して、日本の歴史考古学が得意とする歴史研究の補完としての視点が付加されれば、より充実した内容となると考えるのは筆者一人ではあるまい。

かつて一九六〇年代に、北米歴史考古学界で論議された、考古学は歴史学なのか人類学なのかと並ぶ問題を、一義的に決定するには有効な解決策とは言えない。むしろ日本・北米の歴史考古学の比較という作業から見るとおゆる方向は、北米歴史考古学には、より歴史研究を補完するものとしての性格を強めた方が良いと思われる。これに対しても日本・北米の歴史考古学では、北米歴史考古学の中でもとくに人類学にかかる成果を示している部分—本文中の筆者の表現方法からすれば、コトを扱う歴史考古学の成果—の導入が有効になろう。それぞれの地域で独自に成長してきた歴史考古学の特色を取り入れるにこより、歴史考古学の未来のみならず、考古学研究の全体的枠組みへの新しい成長を促す契機となるであろう。

参考文献

- 邦文
浜田 耕作 一九二九 『考古学研究』 座右寶刊行会
鈴木 公雄 一九〇〇 「古戦場の考古学—最近のアメリカ歴史考古学の新しき詮み—」 史学雑誌 一〇九編 第一回

欧文

- Deetz, James 1996 In Small Things Forgotten 2nd Ed., An Anchor Books, Doubleday
Deagan, Cathleen 1982 Avenues of inquiry in Historical archaeology. In Advances in Archaeological Method and Theory, Vol. 5, edited by Michael Schiffer, Academic Press
Rouse, Irving 1972 Introduction To Prehistory. McGraw Hill
邦訳 鈴木公雄 一九七四 『先史学の基礎理論』 雄三體出版
Singleton, Teresa A. ed., 1985 The Archaeology of Slavery and Plantation Life. Academic Press